

2022年3月13日

四旬節第二主日

菊地功大司教 メッセージ

四旬節は、わたしたちが信仰の原点に立ち返るときです。その原点は、一体どこにあるのでしょうか。

創世記は、まだアブラムと呼ばれていたアブラハムを神が選び、契約を結ばれた出来事を記しています。暗闇の中で天を仰ぎ、「星を数えることができるなら、数えてみるが良い」と告げられたアブラハムの驚きを想像します。現代の東京の夜空であれば、もしかしたらすべての星を数えてしまえるのかも知れませんから、それではなんとも情けない話ですが、創世記の時代の夜空ですから、まさしく満天の星であったことだろうと思います。逆に言えば、そのこと自体が、人間が築き上げた繁栄が、結局は神の存在を見えないものとしてしまっていることを象徴しているのかも知れません。アブラハムの信仰の原点は、暗闇に満天の星を眺め、未来に向けた想像を超えた約束を与えられ神と契約を結んだ、そのときの驚きであったと思います。

パウロはフィリピの教会への手紙で、キリストの十字架にこそわたしたちの信仰の原点があることを強調し、信仰における旅路は、わたしたちをこの世での繁栄ではなく、本国である天の国へと導いていることを指摘します。

ルカ福音は、イエスがペトロ、ヨハネ、ヤコブの眼前で栄光を示された御変容の出来事を記します。神の栄光を目の当たりにしたペトロは、何を言っているのか分からないままに、そこに仮小屋を三つ建てることを提案したと福音は伝えます。ペトロはその栄光の中にとどまりたかったのですが、イエスは困難に向けて前進を続けます。福音はモーセとエリヤが共に現れたと記します。律法と預言書、すなわち旧約聖書は、神とイスラエルの民との契約であり、信仰と生活の規範でありました。そこに神の声が響いて、「これはわたしの愛する子。これに聞け」と告げたと記されています。イエスこそが旧約を凌駕する新しい契約であること、すなわちイエスに従う者にとっての信仰の原点であることを、神ご自身が明確にしました。

わたしたちの信仰の原点は、イエスの言葉と行いにあります。教皇ベネディクト 16 世は、それについて、「信仰とは、何よりもまず、イエスとの深く個人的な出会いです。そして、イエスの近さ、友愛、愛を体験することです（2009 年 10 月 21 日の一般謁見）」と述べています。

四旬節は、信仰の原点、すなわちイエスとの個人的出会いに立ち返るために、御父のいつくしみに生きるようにと勧めます。いつくしみの具体的な行動の中でわたしたちは人と交わり、そこにいつくしみそのものである主がおられるからに他なりません。わたしたちは自らのあわれみ深い行動を通じて、また他者からのあわれみの業によって、そこにおられる主と出会います。わたしたちの信仰の原点の一つは、いつくしみの業、愛の業であります。

先日 3 月 11 日で、東日本大震災から 11 年となりました。教会は、災害の前から地元根付いて共に生きてきた存在として、これからも東北の地元の方々と共に歩み続ける存在です。教会の東北におけるこの 11 年間の歩みは、どこからかやってきて去って行く一時的な救援活動に留まらず、東北のそれぞれの地で、地域共同体の皆さんと将来にわたって歩みをともにする中で、いのちの希望の光を生み出すことを目指してきました。そこに主イエスがおられます。連帯と支え合いの交わりの中に、主イエスがおられます。具体的な人と人との交わりの中で、わたしたちは主と個人的に出会います。それぞれの信仰の原点を、見つめ直しましょう。